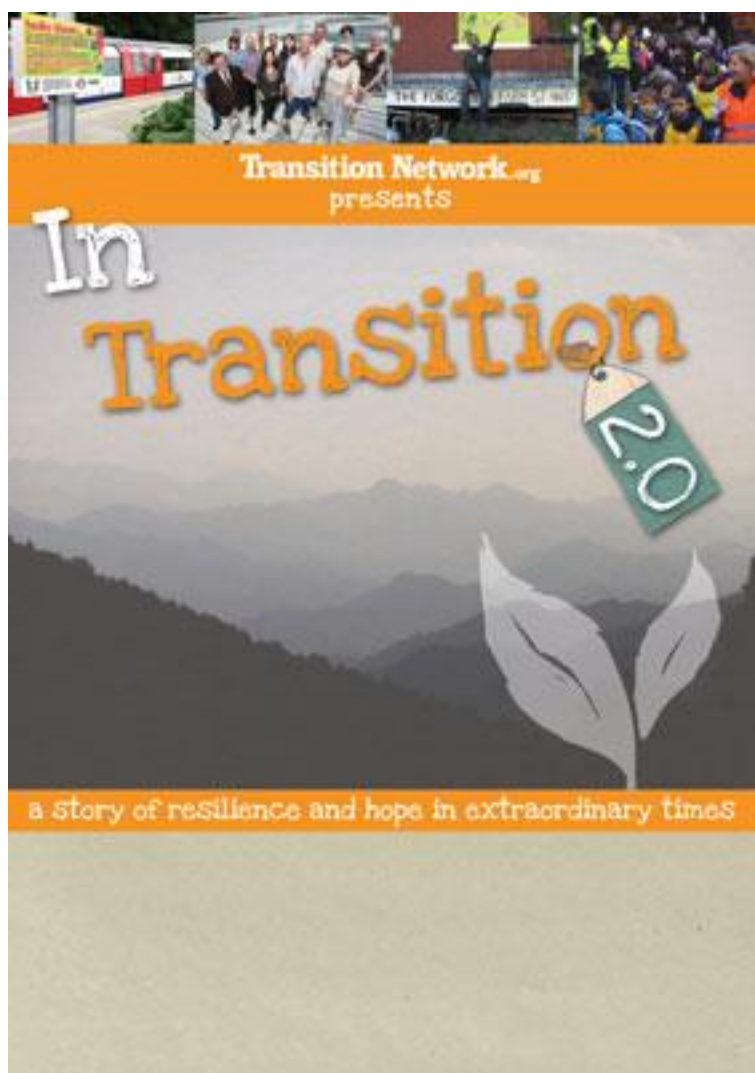


ドキュメンタリー映画『In transition 2.0』上映会+講演会開催のお知らせ  
2014年10月31日(金) (1303教室) 文教大学国際学部映画上映委員会



2014年10月31日(金)

- 映画上映 15:20-16:30 (1303教室)
- 講演会 16:40-18:10 (1303教室) ゲスト: トランジションタウン茅ヶ崎
- 会場 文教大学湘南キャンパス

お問い合わせ: 国際学部事務室 (0467 - 54 - 3717) / [b1w41057@shonan.bunkyo.ac.jp](mailto:b1w41057@shonan.bunkyo.ac.jp) (小林)

\* 入場無料・一般の方もご参加ください。(バスをご利用ください)

ドキュメンタリー映画『In transition 2.0』(トランジション進行中 2.0 日本語字幕版)

(2012年、Transition Network 制作 1時間6分)

HP: トランジション・ジャパン公式ページ

<http://transition-japan.net/wp/dvd> 販売・上映会

映画〈トランジション進行中 2.0〉トレーラー

<http://www.youtube.com/watch?v=dbec9BaGw9M>

主催：国際学部(対外活動委員会/国際教育連帯小委員会)映画上映委員会

いま住んでいる地域をコミュニティの力を合わせて活動することで、持続可能にしていくこと。それがトランジション・タウン。すでに世界 1800 地域、日本では 25 を超える地域がトランジション・タウンとして名乗りをあげ、あるいはその準備を始めています。

『In Transition 2.0』は、日本語に訳せば『トランジション 進行中 2.0』。イギリス、アメリカ、ポルトガル、ニュージーランド、インド、日本など世界各地の多岐にわたる取り組みが紹介されているドキュメンタリー映画です。トランジション運動の始め方から地方自治との協働まで。顧客が出資するパン屋さん、地域の発電所づくり、といった先進的な取り組みと同時に、空き地や駅のホームに菜園を作ったり、村を清掃したり、家の壁を塗り替えるだけでも、人が元気になる、地域に活気が出てくる。そんな、トランジション・タウンの魔法ともいえる事例もたっぷり。この映画を見たら明日からでも自分の住んでいる地域で始めたいかなるかもしれません。日本からは藤野電力の活動が紹介されています。

トランジション・タウンとは、ピークオイルと気候変動という危機を受け、市民の創意と工夫、および地域の資源を最大限に活用しながら脱石油型社会へ移行していくための草の根運動です。パーマカルチャーおよび自然建築の講師をしていたイギリス人のロブ・ホプキンスが、2005 年秋、イギリス南部デボン州の小さな町トットネスで立ち上げ、3 年足らずの間にイギリス全土はもちろんのこと、欧州各国、北南米、オセアニア、そして日本と世界中に広がっています。

トランジションとは「移行」を意味します。何から何への移行かと言えば、「過度に石油などの化石燃料に依存した社会経済システム」から「自然との共生を前提とした持続可能な社会経済システム」への移行です。この移行をすみやかに行う必要性・必然性を高めている要因は、大きく 2 つあります。1 つは「気候変動」。日本では、「地球温暖化」という表現の方が一般的ですが、いずれにしても化石燃料の大量消費により大気に二酸化炭素をはじめとする温室効果ガスが蓄積し、それが招く大気の急激な気温上昇が気候システムを不安定化させ、自然環境や人類の生活に破壊的な影響を与えるというものです。これに対処するには、炭素の排出を抑制・減少させる必要があるのは周知の通りです。そして、もう 1 つは「ピークオイル」です。これはまだあまり知られていませんが、石油などの化石燃料の生産がそう遠くない将来に頭打ちになることを指します。その時期がいつかについては議論が分かれています。有限の資源である以上、いつかなくなることには変わりありません。ここで注意していただきたいのは、ピークオイルとは石油が直ちに枯渇することではありません。問題は、石油の供給がピークに達した時点から、需要とのギャップが拡大し始め、それによって石油のコストが急上昇し、たとえ地中に残っていても手が届かなくなることにあります。つまり、ピークオイルとは「安い石油」が枯渇するということであり、それを前提とした現在の社会経済システムの終焉を意味するのです。